

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Eunji Choi
論文題目	Weaving the Networks of In/formality in African Urban Transport: Ethnography of <i>Tera Askebari</i> in Addis Ababa (アフリカ都市交通のフォーマルとインフォーマルの関係を紡ぐ —アディスアベバのミニバス乗り場で働く人々の民族誌—)		
(論文内容の要旨)			
<p>1980年代以降、アフリカの都市化は急速に進み、公共交通機関の必要性が高まった。しかし、その整備は十分でなく、民間の個人が運行する小型バスやミニバスによるパラトランジット (準公共交通機関) が台頭した。現在パラトランジットは、アフリカの都市全体で約70~90%の移動手段を提供し重要な役割を担っているにもかかわらず、従事する労働者は「インフォーマル」な雇用労働環境にあり、法的な規制に違反して運営されている場合も多い。</p> <p>エチオピアの首都アディスアベバには、ミニバスが主要な公共交通機関として利用されているなかで、ターミナル (乗降場所) においてミニバスや乗客の流れをコントロールするテラ・アスケバリという人びとがいる。テラ・アスケバリは当初、インフォーマルな仕事として始められたが、2011年に中小企業(MSE)開発庁が介入した後、ほとんどのグループが法的地位を獲得した。しかし、彼らの雇用やミニバスの管理などにはインフォーマルな側面は依然として残っていた。そのため、テラ・アスケバリの活動は、学術的にも社会的にも否定的に捉えられ、社会における彼らの役割や貢献はほとんど明らかにされてこなかった。</p> <p>本論文は、テラ・アスケバリがアディスアベバの都市交通において果たす重要な役割と、時には強かな振る舞いを見せながらフォーマルとインフォーマルが共存するような社会へ貢献する有様を、彼らの実践を観察することによって解明したものである。本論文は、テラ・アスケバリとはどのような人びとで、どのようにして都市交通部門における重要な存在になったのか、彼らの役割は何であり、政府の政策の影響下でどのように事業を行っているのか、そして彼らが直面した課題と、それに対処するためにどのような戦略を立てるか、という問いに答えている。</p> <p>第1章は、目的、方法論、調査地の概要とともに、本論文の全体像が示されている。32のターミナルでインタビューと参与観察を行い、アディスアベバのテラ・アスケバリ成立の歴史的背景を解明することを目指した後、市の東部にある主要なターミナルで詳細な定点調査を実施している。</p> <p>第2章は、研究テーマに関連する文献レビューである。インフォーマル経済、アフリカの交通機関の労働者、アディスアベバの公共交通機関、アディスアベバのテラ・アスケバリに関する議論の4つの部分に大別して整理している。</p>			

第3章では、MSE開発庁が介入する前のアディスアベバにおけるテラ・アスケバリの形成の歴史的プロセスについて論じている。テラ・アスケバリが、ストリートギャングの結成、エリトリアーエチオピア戦争の退役軍人の参入、ガッシュ・アベラ・モラという人物のはじめた社会美化プロジェクト、そして都市開発下でのテラ・アスケバリの成長と台頭という4つのプロセスを通じて発展してきたことを明らかにしている。

第4章では、MSE政策の影響を受けているテラ・アスケバリの現在の経営活動に焦点を当て、MSEプログラムが、小規模企業の事業運営において大きな自律性を許しており、この条件が現在のテラ・アスケバリの仕事に少なからず影響を与えていることを示した。テラ・アスケバリがフォーマルとインフォーマルの両者の性質を兼ね備えるという利点を活用し、テラ・アスケバリの幹部に利益をもたらすだけでなく、都市部の失業中の若者にも新たな就業の機会をもたらしていることを見出した。

第5章では、ターミナルXで雇用されて働く若年層のテラ・アスケバリたち（YB）の生計と対処戦略を観察した結果を示している。YBのほとんどはエチオピア南部地方からの移入者であり、主にハディヤ、ウォライタ、グラゲの各民族から構成されている。彼らの大半がグルド・ショラと呼ばれる移民向けの住居に住んでいた元YBたちに勧誘された。インフォーマルな雇用が不安定な状況下で、YBたちはターミナルを継続的に訪れ、他の交通労働者と頻繁に連絡を取り合うことで、多様な仕事の機会を求めていることを明らかにしている。

第6章は、ミニバスや乗客に対するテラ・アスケバリの仕事ぶりを観察することにより、彼らの社会的役割と社会への貢献を明らかにすることを目的に、テラ・アスケバリの活動、言語の使用法、および乗客の認識について分析している。

第7章では、まとめと包括的な議論を行っている。結論として、パラトランジット従事者としてのYBが求職活動を通じて、不安定な都市の労働市場に対処するための高い適応性と実行力をもっていること、また、テラ・アスケバリが、時には違法行為をおこなう強かな面をもちながらも、ターミナルの治安を維持している主要なエージェントであり、フォーマルとインフォーマルの両方の性質を兼ね備える複合的な特徴を利用して生活戦略を描くバレムヤ（強かな戦略家）であることを指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

1980年代以降のアフリカにおいて急速に進行した都市化の波は、多くの国々で人口の集中や移動の機会を増やし、都市住民が日常的に利用する公共都市交通機関の必要性を高めた。しかし、都市の交通を担う公的事業の整備は不十分なままで、その不足を補うように個人が運行する小型バス、軽三輪車、自動二輪車などによるパラトランジット（準公共交通機関）が台頭した。本論文が対象とするエチオピアの首都アディスアベバは400万人を超える人口を擁するアフリカ有数の大都市である。ミニバスが発着し乗降客が集まるターミナルには、テラ・アスケバリと呼ばれ、人と車の流れをコントロールする役割を担って働く人びとがいる。本論文は、国家や地方自治体によるフォーマルな介入と、その影響が及ばないインフォーマルな部分とが互いに干渉しながら共存するような都市社会において、テラ・アスケバリが今日のアディスアベバの都市交通運営に果たす役割、直面している問題、そして今後の課題を明らかにした優れたエスノグラフィである。

本論文の学術的な貢献は以下の3点にまとめられる。

第1に、本論文が、都市のエスノグラフィとして、テラ・アスケバリとはどのような人びとであるかを、その誕生の歴史的経緯から、彼らが都市交通運営において果たす役割にとどまらず日常の生活実践や独特の会話表現に至るまで、長期のフィールドワークに基づく詳細な観察と聞き取り調査によって明らかにしたことは評価に値する。フォーマルとインフォーマルの要素が共存するような社会において、時には強かな振舞いを見せながら、両方の要素を紡ぐようにして生活を構成していくテラ・アスケバリの有様を生き生きと描き出すことに成功している。

第2にあげるべき点は、都市のインフォーマル部門に付与されがちな否定的印象を逆転するような実例として、アディスアベバのテラ・アスケバリが都市交通運営において果たす重要な役割を見出したことにある。アフリカに限らず都市の公共交通におけるインフォーマル部門が否定的に捉えられ、政策的な介入や支援によってフォーマル化されていく事例が多い。当初、インフォーマルな仕事として始められたエチオピアのテラ・アスケバリは、2011年に中小企業開発庁によって組織化され法的地位を獲得した後も、雇用やミニバスの管理などにおいてはインフォーマルな側面を残すことによって運営されてきたという指摘は重要である。

本論文の第3の学術的貢献として、都市における若者の職業選択と生活戦略をテラ・アスケバリの事例を通じて分析し、従来のフォーマルとインフォーマルという二項対立的な事象の理解が必ずしも問題の解決につながる正しい理解を導き出していないという結論を導いたことがあげられる。アディスアベバの生活者にとって共通語であるアムハラ語で「バレムヤ」、すなわちフォーマルとインフォーマルの両方の性質を兼ね備える

複合的な特徴を利用して生活する強かな戦略家として、テラ・アスケバリの特質を解明したことは、アフリカ都市における地域研究の成果として優れている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年1月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。